



欲の数珠
繋ぎ会

川崎ゆきお

「最近どうですか。あまり交流はしていないようですが」

「交流ねえ」

「同業者だけじゃなく、他業種との交流も必要ですよ」

「そうなんだがねえ、最近調子が悪くて」

「体調ですか」

「それもあるけど、仕事がうまく行かなくて、どんどん縮小して……」

「だからこそ交流が必要なんですよ。仕事は人と人で成り立つんですから」

「分かっていますがね、元気がなくて」

「覇気ですか」

「はい」

「だからこそ……」

「それで分かったんです」

「えっ、何が」

「これか、とね」

「何ですか、それ、教えてくださいよ」

「欲のない奴のところには人は集まらない」

「はあっ？」

「私のように、もう欲が薄れた人間のところには、人は来ないですなあ」

「何ですか、それは」

「さあ、それはよく分かりませんがね、何となくそう感じるのです。人のものまで横取りしそうなほどの欲深い奴の方が人気がある。欲張りな人のほうがいいようです」

「それは、どういう仕掛けか」

「さあ、その人について行けば、おこぼれがもらえるだろうし、その人が上へ行けば、自分も上に行ける。一段、二段と」

「それはそうだけど」

「まあ、それは、いいポジションにいないと駄目ですよ。その入り口でもかまわない。今少し勢いのある人程度でもね。地位はまだ低くても、これから延びそうな」

「そんな人、いますか」

「金田君が今、その状態でしょ」

「ああ、金田か。僕も行ったよ。最近飲み」

「かなり周囲に集まっているでしょ」

「いるいる」

「金田君と同じように勢いのある黒田君は駄目でしょ」

「ああ、暗いねえ、あの黒田は」

「名前が偶然そうになっているだけで、黒田姓は全部暗いわけじゃないよ」

「そうだね。で、黒田がどうしたって」

「黒田君には欲がないことが分かったんだ」

「あ、そう」

「あるにはあるけど、欲張りじゃない。それが欠点なんだ。だから、人が集まらない」

「じゃ、やはり金田の方がいいんだ。僕もそう思う。金田と仲良くしたい。黒田はもういい」

「それは君に欲があるからだよ。私は黒田君を選ぶけど、自分からは近付かないが」

「じゃあ、最近どうしてるんだ」

「だから、そういう下心のある交流が面倒になったんだ」

「もっと欲を出せよ」

「出し続けたけど、無駄なことだと気付いたよ」

「そうだね、この業種、下る一方で、辞めていく人が多いしなあ」

「そうそう、だから欲を出しても、同じなんだ」

「でも金田は違ುದろ。あいつは儲けているぞ」

「だから、金田君はより欲深い奴と組んだからだよ」

「欲張りの数珠繋ぎかい」

「ということだ」

了